

以て之れが研究に付ては吾宗諸先師の所説及び台當異目等に付ても十分の研究を要す従て一紙半箋の克く盡す所に非ざるが故に之れが研鑽は先達の高教に従ひ以て他日に期せんと欲す。(なほり)

論妙法五字與 三大秘法係關

(承前)

藤田光肇

第貳節 本門の題目

題目とは二意あり 所謂正像と末法と也 正法には天親菩薩龍樹菩薩題目を唱へさせ給ひしかども自行ばかりにしてさて止ぬ 像法には南岳天台題目計り南無妙法蓮華經と唱へ給ひし自行の爲にして廣く他の爲めに説かず是理行の題目也 末法に入つて今日蓮が所唱題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なるべし名体宗用教の五重玄の五字也 (縮二〇五三)
此れ吾人が三時の異相の章下に於て略説せるが

如く、龍樹等の如く『法華論』『大論』等を作りて、題目を讚美したれども是れ文相のみなるべし。天台傳教等、盛に法華經の幽玄なる妙義を談じたれども但題目は實相の眞理に至るの近道となし、其立行たる但一心三觀を正行として、信心唱題の妙行を奨めず。設ひ唱題の事ありしも自行ばかりにして化他に出でず。何故に龍樹天親等天台傳教等題目を自行計にして、廣く化他の爲めに説かざりしかと云ふに、即ち

答此に二意あり一は時の至らざるが故に 二は付囑に非るが故也凡妙法五字は末法流布の大白法也 地涌千界の居士の付囑也 是故に南岳天台傳教等内に鑑て而末法の導師に讓之不二弘通給也 (縮一〇〇〇)

此二意既に吾人が付囑の起盡三時の異相の章下に於て述べたり。故に是れと對見して祖意の所存窺ひ知るべし。而して末法に本化所弘の題目は釋尊の因行果徳の二法を具足せる功德甚勝なるものにして是れ本門の題目の體相なるべし。

第三節 本門の戒壇

今や國民の思想混乱の極致に達し、信仰の皈着する所を知らず。而して思想の混乱を根治し信仰の統一を斷行すべく、將に新に建立せざるべからざるもの、即ち本門の戒壇也。

戒壇者王法寫佛法佛法合王法王臣一同に本門の三秘密の法を持て有徳王覺徳比丘の其乃往を移末法濁惡の未來時教宣並御教書を申し下して尋似靈山淨土にも最勝地可建立戒壇者歟可得時耳云々 (縮二〇五三)

天臺叡山の戒壇を理戒と云び、之に對して我宗の戒壇を事壇と云ふことは既に三秘形貌の章下に於て畧説せるが如しと雖、本宗の事壇中更に事と理の兩分別あるべし。即ち理壇とは理想的戒壇にして、即ち久遠劫來乃至盡未來際常住にして轉變せず。近くは靈山虛空二處三會より大聖人乃至我等信心の頭の内に築かるゝ内在的精神的道場也。事壇とは前述の内在的理想戒壇が宗團的國家的乃至世界的に現れたる、表現的具體的道場也。

此事壇の中に於て又分壇と滿壇とを分別することある也。然らば滿の事壇とは如何なるもの歟。所引の『三秘抄』の即ち王法佛法に寫し佛法王法に合したる時建立せらるべきものにして、此戒壇は即ち三國並に一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず大梵天王帝釋等も來下して躅み給ふべきとは是也。分の事壇とは前述の如き滿の事壇建立迄に個人的、部分的に建立せられたる事壇を云ふあり。經王所安の道場第草堂、皆是戒壇也。

されば我等居住して一乘を修行せん之處は何れの所にも候へ常寂光の都たるべし我等が弟子檀那とならん人は一步も行かずして天竺の靈山を見本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふことうれしとも申すばかり無し (縮八四二)

是れ正しく事の分壇を説き給ひし祖文と見へたり。依つて以て祖意を窺ふに足らん。

而して前所引『三秘抄』に顯れたる『王法佛法に寫し佛法王法に合して乃至最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきもの也』の御文は、正しく是れ滿の

事擅を示されたるもの也。時を待つべきのみ、實に弟子擅那等異體同心にして、正法の宣傳に努め、所謂一天四海皆歸妙法の春の來るを待つべきもの也

日本國一同に爲_二日蓮が弟子擅那一我弟子等の出家は爲_二主上上室の師一在家は列_二左右の臣下一將又一閻浮提一同に皆仰_二此法門一 (縮一七一四)

是れ滿の事擅を成就せし有様を、予言せられたる文也。而して『如說修行抄』の『天下萬民諸乘一佛乘とあつて、乃至 現世安穩の証文疑ひあるべからざるもの也』の御文は即ち妙戒建立の時代に於ける娑婆即寂光の理想境を示せるもの也。

然るに此本門の大戒擅成就の如きは固より空前絶後の一大事業にして、實に宗教的大偉人の手腕を要す。即ち再出の本化大士に待たざるべからずと雖、我等弟子擅那たるもの須く其先驅として奮發勉勵異體同心にして宗風を扇揚し、本門築檀の時を期し世界王民をして眞に娑婆即寂光の法雨に浴せしむ。是れ吾宗の所期也。而して最終の目的にてある也。

第四章 末法の機根

第壹節 鑑機の必要

機根とは總しては、一切衆生の根性を指し、別しては教を受け、又は受けんとするもの、個性を云ふ也。

機者佛教を弘めん人は必ず機根を知るべし

(縮四二五)

と宣へり。然るに衆生の機類萬差なれば釋尊は其度すべき所に隨つて爲に種々の法を説き給へり所謂五時八教、八万四千の法門也。故に佛滅後に於て教を弘め群生を救はんとするものは須く機根を判し知るべき也。故に吾祖五綱の中、第二に機根を立て通して滅後の機を判し別して末法今時の衆生は獨り法花經本門の肝心に依るべき機根なれば今末法に入りぬれば餘經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經あるべし (縮一七一七)

と宣へり而して鑑機上在滅傍正を論すれば在世は傍にして滅後は殊に末法が正意にてある也。

第二節 滅後の機根

滅後の機根に二類あるべし、所謂一は本已有善にして二は本未有善也。

本已有善の機とは本既に根本善の佛種あれば、重ねて聽聞して習熟或は解脱すべき機也。其習熟の機を熟益の機と云ひ、解脱の機を脱益の機と云ふ。熟脱の異りありと雖、其根本善たる佛種の存する点は一也同也

本未有善の機とは根本善の佛種あらざる機也。故に新に佛の種子を入識の心田へ下さざる可らざる機根あり。是即下種の機にして、前者を清善の機と云ふに對して是れを濁惡の機と稱するなり。

今正像末の三時、及能破の教法に配辨するに、正像二千年間の機類は、多くは佛在世に於て聞法下種せし輩、即ち本已有善者あるが故に、大小乗教に依つて、薰習練熟し、或は解脱証果する機類あり。就中正法の機類は心病輕きが故に能破の教は小乘權教の凡藥にて可あるべく又自ら脱益の者

多きなり。像法の機類は心病稍重きが故に、能破の教は、法華迹門の大藥を要すべく、又自ら熟益のもの多きなり。末法の機類は、佛滅を距ること二千年、佛法全 其眞實を失ふ時にして、衆生殆んど佛性を汚穢し、心病最重にして、即ち本未有善の輩ある故に、能破の教は最上の良藥たる、法華本門唯一純圓一實の妙法蓮華經を要すべく、之に依て下種結緣する機類也。

弘教の方軌を云はば攝折二門の内、正像の機類は攝受の順化なり。是れ清善の機あるが故なり。末法の機類は濁惡の機なれば折伏逆化の機なるべし。導師に就いて云はば攝受の順化には、龍樹、天親、天臺、傳教、等にして、末法の逆化折伏立教の導師は本化上行の日蓮大聖人其人なるべし。これは之れ前述題目三時の異相、付囑の起盡の章及本門題目の躰相を明すの章と對見して明かなり。

第參節 本化出現後に於ける末法の機根

末法の機根を細判せんに、概して本未有善と云ふは且く本化開宗以前に約するの大判にして、本

化一度び出でて、下種結縁し給ひし後は、本已有善者、日々に増加すべきなり、されば更に末法の機を細判するの必要生するなり、故に細判を下して多分は逆縁ありと雖、少分は順縁あり。即ち不信謗法の徒は、概して逆縁にして、隨順歸依の僧俗は順縁なり、謗法の徒は、所謂毒鼓結縁の徒あり。謗に因て惡に隨ず、必ず由つて益を得るとは是なり。

又順縁に上中下の三根あるべし。即ち上根とは修三學の徒にして、中根とは五種修業の徒、下根とは但信無解の徒を云ふ也。上中の二根は慧を以て信を助く。末代の上根は、尙上世の下根に及ばず、況んや下根をや、故に但信を以て慧に代ふのみ。正直に方便權教を捨て、壽量の肝心たる妙法五字を唱ふ者は、是れ即其當體蓮花の佛にてある也。故に題目の五字のみ、是れ末法の詮なること、『御義口傳』等の所明に依つて祖文瞭々たり。須く知るべし、末代の衆生は、若は信にもあれ、若は謗にもあれ、俱に妙法五字の題目を離ては、

設ひ壽量に於けるも、尙無益あり。況や其餘をや、故に二十八品總て題目を結て、方に末法弘通の要法ありとす。

故に末代の衆生は、利鈍順逆を簡はず、一同に妙法五字に依つて、以て得益する機なること知るべき也。

第五章 五字と三秘との交渉

第一節 教道の一途に依る三秘

上來述せる所の三大秘法あるものを、一言にして達意的に言ひ顯す時は、即ち

本門の本尊とは塵点劫より己來此土有緣深厚本有無作三身教主釋尊是也。

本門の題目とは、四海一同に壽量の肝心たる、南無妙法蓮花經の五字、七字の題目を唱へ奉る是也。

本門の戒壇とは、王法佛法に寫し、佛法王法に合して、王臣一同に三秘密の法を持つて、有徳王覽徳比丘の乃往を末法濁惡の未來に移さん時、鳳詔有て、靈山淨土に似たらん、最勝の地を擇て、

當に此戒壇を建立すべき也。

是れ未だ顯露教道の一途なるのみにして、是れ文義意の中には、但文相なるのみ。次節に往ひて更に説く所あるべし。

第二節 護道の實義に依る三秘

若し上來所述の三秘を、本化別頭の深秘の義に逗會する時は、其所論の一重立到りたることを知るべし。

所持の法は妙法蓮花名は即體也。體は即名也。文にして文にあらず。義にして義にあらず。三千の諸法、一言を以て之を蔽ふ。能持の人は、無作三身當體蓮花本有尊形是也。其人所持の處即常寂光土、本有の戒壇、又是れ入曼荼羅なるもの也。須く知るべし、三秘は只是一體の三名あることを。解し易からしめんが爲に唯一體の妙法五字を開して、以て三秘を明し給ふなるべし。此の意を得て言ふ時は、則ち題目即戒壇即本尊也。只是れ一法の異名にてある也。

故に三秘と妙法五字とは開合卷舒の異りあるの

み。法體は不變あること知るべし。

夫れ一言の妙法は、心想を絶す。此法は示すべからず。言辭の相寂滅せり。衆生をして、此妙に入らしめんと欲するが故に三秘を開説せられし也。

第六章 機根と五字及三秘

末法今時の機根は、衆生の心病甚重かるが故に、小乘權教及門迹等の凡藥を以ては、到底平癒せしむること不可能也。加之龍樹天親等の藪醫者、又は天臺傳教等の漢方醫が診察されば之れ果して當れりと云ふべからず。若し内鑑に就て診察等を得たりと雖、稱前迹門等の所謂藥舖の棚ざらしの凡藥を服して、何の効能かあるべきぞ。

須く最重患の病者は、本門の肝心妙法五字の、色香美味皆悉具足の大良藥にあらずんば治する事能はざる也。例せば醫者は、新教育を受けたる洋行販りのドルトル博士にして、診察は最新式の器械を應用し、藥は歐米新流行の大良藥なる如く、導師は時機相應上行の再誕、宗義は、本化別頭の教觀、

法は八万四千の法門の精粹、一部八卷の肝心たる妙法五字也。

末代の上根は尙上世の下根に及ばず、故に末法今時は一同に下根なるべし。教彌實なれば位彌下る、最下根を利益すること今典の正意也。

三祕抄の此法門は義を案じ、理を詳かにせよとの御指南に準じて、祖意の所在を案ずるに、本門壽量の肝心たる妙法五字を開して、以て末代の順機の爲に與へ、又此三祕を合して一九となして、末代の逆機の爲に投じ給ふこと知るべし。三祕既に前述の如く、五字と同一體の三方面なる上は、五字と同じく、末法の當機に適應せること論を俟たず。

只開して順機に向ふと、合して逆機に當るとの謂のみ。

(人) 結 論

上來所述概略妙法五字と三大祕法との關係を論じ畢ぬ。例を以て重ねて結論となさば吾學院の學

院長猊下に寄せて、之を見ん。日蓮宗管長小泉日慈猊下、身延山法主小泉大僧正、日蓮宗大學、又は祖山學院の學長たる小泉日慈猊下等と云へるが如く、其一つの小泉大僧正を管長と見、法主と稱し又は學長と云ふ、然りと雖所觀の猊下其人は唯一なるが如く、唯一の妙法五字を所觀の妙境則ち客觀的信仰の對象と見ては本尊と云ひ、能觀の妙智則ち主觀的の内容或は發作ある行法と見たる場合は題目、境智寫合の場所にして、政教一致の靈府也と見る時は、戒壇とありて顯るゝなり、然れども三祕は本來唯一法の開出あるのみ。

説去説來、無量無邊、諸佛神力を以て説くとも盡すこと能はじ、然れども還つて本源を見れば、一言の妙法は由來變せず、法界森羅、本と自ら妙法にてある也。

眞實也甚深也。唯信得すべく、識得すべからざる也。

合掌 南無妙法蓮華經

—(完)—